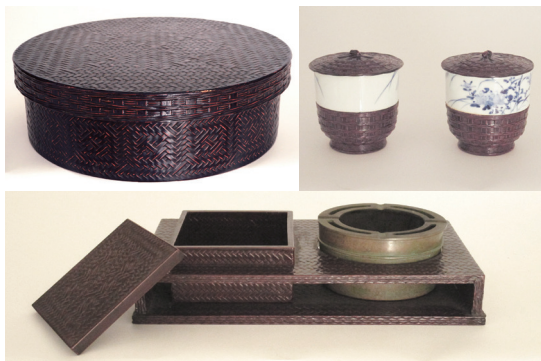


久留米の伝統工芸品と古文書 近現代の暮らしを今に伝える

「西健一郎氏収集資料（第7次）」

本資料群は、西健一郎氏が収集した、藍胎漆器27点と古文書類167点です。

藍胎漆器は、竹で編んだ器などに漆を塗り重ねてつくる、福岡県知事指定特産民芸品です。今回寄贈を受けたものには、近代から現代にかけての茶櫃や煙草盆、火鉢、花器など、さまざまな種類があります。藍胎漆器の生産最盛期を支えた赤松商店・久留米藍胎漆器合資会社（久藍社）の製品が含まれており、



左上から時計回りに茶櫃（赤松商店製）、ふた付湯呑み、煙草盆（共に久藍社製）

藍胎漆器の生産状況の一端を知ることが出来ます。古文書類には、江戸時代から明治時代にかけての、旧久留米藩家老・吉田家に関するもの、

明治時代から昭和戦後期の土地関係証書、新聞・冊子などがあります。

前者には、吉田氏宛の領収書が含まれます。項目は、炭や本のほか、診療料や田租（田にかかる税金）などです。なかでも特に興味深いのは、明治42年（1909）に牛肉問屋が発行したもので、牛ロースが「金五拾銭」で購入されたことが分かります。吉田家は日常的にこの問屋を利用していたようで、紙面に「吉田氏御用」の朱書きがあります。こうした領収書も古文書の一つで、当時の人々の暮らしぶりを今に伝える資料です。



牛肉問屋「近江屋商店」が発行した領収書
店は現在の東京都中央区日本橋にあった

中学新聞は学校生活を映す鏡 「三中新聞ついに誕生」

「三中新聞」

久留米市立第三中学校（現・櫛原中学校）で、昭和25年（1950）6月20日に発刊された学校新聞の創刊号です。

寄贈者の亡き父・近藤重信氏は、文芸部に属し、三中新聞の編集部長を務めました。新聞は学校長の訓辞「生徒としての心構え」、生徒会長の寄稿文「校刊に際して」、「三中七不思議」や、校内での舊棺の発見を伝える「合葬発見さる」、クラブ活動の紹介、修学旅行の思い出など多岐にわたる記事が掲載されています。生徒の手によって作られた新聞からは、自主性を重んじた当時の校風や生徒の気質などがうかがえます。



三中新聞（発行人：小林直三郎）

善導寺町勿体島の市エビス 寄託から寄贈へ

「エビス座像」

総高約30cmの石像で、もとは善導寺町勿体島土井ノ下に安置して祀られ、1月15日、5月20日、10月20日を祭日としました。本像には、昭和16〜44年（1941〜69）の祭日の記録1冊が付属します。

その記録や平成3年度に寄託を受けた際の聞き取りによると、かつて集落の15軒が1年交代で、朝に御酒・御飯を供え、祭日に会食をし、牛馬の売買等の商いも行われていたといえます。勿体島辺りは古来より水害多発地帯で、関係書類の多くも失われてしまったとのことですが、本像には伝承が伴い、集落のエビス信仰を伝えていきます。



エビス座像（正面から）